弘前大学教育学部紀要　第 122 号：23 ～ 35（2019 年 10 月）
Bull. Fac. Educ. Hirosaki Univ. 122：23 ～ 35（Oct. 2019）

戦後開拓地における学校と地域社会（２）
―教師たちから見た 1950 年代の新制中学校と開拓地―

School and community in Postwar Reclamation（２）
A case study on a junior high school and community in a reclamation viewed from the teachers in 1950 s

高　瀬　雅　弘*
Masahiro TAKASE*

概　要

本稿は、「緊急開拓事業」のもとで成立した戦後開拓地を学区域に含む新制中学校を対象に、1950 年代に同校に勤務した教員の目から捉えた地域のありようと教育実践を手がかりとして、「新しい地域社会」のなかで「新しい学校」がいかに形成され、展開していったのかについて考察するものである。具体的には、①戦後開拓地に設立された学校がいかなる特徴を持っていたのか、②地域の人びとが学校をどのように受け止め、関わっていったのか、③教師たちはどのような実践を行ったのか、④そこでの教育経験は、地域の教育文化のなかにどのように位置づけられるのか、を問うことで、戦後開拓地という「新しい地域社会」から捉えた学校、とりわけ新制中学校の存在意義を明らかにする。

キーワード：戦後開拓地　新制中学校　へき地教育　地域社会　ライフヒストリー

１．はじめに

（１）関心の所在

青森県鰺ヶ沢町、ＪＲ五能線の越水駅と鳴沢駅の間の岩木山を望む田園風景のなかに、古びた木造の細長い建築がある。かつてこの地に存在した旧陸軍山田野演習場第９号兵舎であり、1947（昭和22）年から1959（昭和34）年まで中学校校舎として使用された建物である。

この旧兵舎を含む山田野演習場廠舎（軍隊が使用する宿泊施設）は、敗戦後間もない1945（昭和20）年11月に策定された「緊急開拓事業実施要領」に基づき、約5,000ha の広大な演習場跡地である山田野地区に入植した人びとの生活拠点として使用された。その後、入植者の住居はそれぞれの耕地に近い場所に移転し、残された兵舎は順次解体され、建築資材として再利用されていった。そのなかでただ１棟残存したのが旧第９号兵舎であり、築100年を超えた現在も、腐朽による倒壊の危機に直面しながら[1]、何とかその姿を保っている。そしてそのうちの約12年間を、鳴沢村立東鳴沢中学校として刻んできた。

旧満州・樺太からの引き揚げ者による戦後開拓地への入植は、既存の地域社会に対しても少なからぬ影響をもたらすものであった。人口の増加にともない、様々な生活インフラの整備が進められた。学校の設置もそのひとつである。とりわけへき地に位置する開拓地では、1946（昭和21）年度に学校分校整備のための補助制度が設けられ、へき地教育振興法と合わせての学校の新設が進められていく。

本稿にとっての課題のひとつは、戦後開拓地の人びとにとっての学校の存在意義を明らかにすることである。開拓地の学校は、多くが地域からの要望によって設置されたものである[2]。ここで学校と地域社会との関わりを問う際には、戦後開拓地の持つ、「個人の主体的『選択』にもとづいて形成された共同体」[3]としての性格に留意する必要がある。そこでは人びとを結びつける存在は、所与のものとしてあるのではなく、新たに構築されるものである。その際に学校が果たし

＊弘前大学教育学部社会科教育講座
Department of Social Studies Education, Faculty of Education, Hirosaki University

た役割は大きいと考えられる。

1947（昭和22）年の学校教育法施行にともない、前期中等教育としての新制中学校が発足する。この新しい学校は、一元化された中等教育機会への要求と、数々の設立の困難を背景にしながら社会に定着していった[4]ものであった。こうした新制中学校を、戦後開拓地の側から捉えたとき、２つの固有の状況が浮かび上がる。ひとつは、学校づくりと地域づくりの同時並行的な進行である。新しい学校が、様々な模索を繰り広げるなかで、それを受け止める地域社会の側もまた、形成の途上にあるということである。もうひとつは、入植者の子どもたちにとっての「社会への出口」としての中学校の意味づけである。既存の農村と比べ、経営が安定しない開拓農業においては、新たな家業の継承もまた所与のものではない。そうした環境のもとで、入植者や子どもたちにとっての中学校の存在は、小学校以上に大きなものであったのではないか。

本稿が検討対象とするのは、東鳴沢中学校が存在した1940年代末から1950年代である。「新制中学校の学校（教科）の論理と生活の論理をつなげる工夫」[5]が求められていたこの時期は、その後の高度成長期に進行する本格的な「出口」化への過渡期にあたる。そうした過渡性のもとで地域社会と向き合った、当時の中学校の教育課題のありようを捉えたい。

（2）先行研究の知見と分析課題

戦後開拓地と学校の関係は、広くは地域社会と教育という課題領域に位置づけられるものである。

教育社会学においては、1950年代に刊行された『講座　教育社会学』シリーズにおいて、農村社会学の地域社会構造把握の成果に基づきながら、地域類型ごとに見られる性格と教育課題について、同時代的な関心に基づいた分析が行われている[6]。そこでは農山漁村の特性に基づいた実態把握が行われているが、課題意識じたいは農村における「封建遺制」といったものであり、新たに成立した農村としての戦後開拓地におけるコミュニティのありようは関心に含まれていない。

戦後開拓地は、その多くが山間部に位置したこともあり、地域と関わる教育課題はへき地教育との関わりで把握されてきた。『講座　教育社会学』では、馬場四郎と籠山京が、戦後開拓地の持つ地域特性に注目しつつ、そこでの教育課題と将来展望をそれぞれ提示している[7]。ただし、へき地教育研究における戦後開拓地と学校の関係は、小規模で、より地域に密接した小学校を対象としたものがほとんどである。1950年代はじめに全国的な注目を集めた無着成恭の『山びこ学校』[8]といった、山間部の中学校での教育実践記録は生み出されていたが、戦後開拓地を対象としたものは管見の限りほとんど見られない[9]。

一方、農村と中学校の関係を、進路選択という視点として捉えたものとしては、橋本紀子や横畑知己の研究[10]がある。これらは農村の地域社会に即して中学校がいかなる存在として捉えられていたのかを示すものであるが、その時期は高度経済成長期であり、上に述べた過渡期の状況を対象としていない。

また、戦後開拓地そのものを対象とした研究においても、学校教育への言及は見られる[11]ものの、歴史的展開の一場面として扱われているに過ぎない。本稿の対象でもある山田野地区を対象とした調査[12]では、現存する旧校舎の建物についての元生徒への聞き取りを行っているが、そこでも学校じたいが主題化されているわけではない。

以上のような研究状況をふまえ、本稿では、以下のような分析課題を設定する。

第一に、開拓地を背景に設置された中学校の特質とはいかなるものであり、その設立の過程に入植者たちがどのように関わっていたのかを考察する。ここでは全国的な教育要求に通底する要素を押さえながら、対象地域の持つ特性にも留意する。

第二の課題は、開拓地の人びとの学校への理解や態度がどのようなものであったのかを明らかにすることである。ここでは開拓地という新しい地域社会と中学校との関係を問うことになる。これはそこに表れる保護者のスタンスや、その子どもたちの姿を通して、開拓地の人びとのありようを浮かび上がらせることでもある。

第三に、戦後開拓地を背後に持つ学校において、教師たちがどのような実践を行っていたのかについて考察する。第二の課題の検討から示唆される内容を受けて、教師の側からは地域社会に対していかなる働きかけが行われたのかを明らかにする。

第四に、本稿の分析対象となる中学校での実践が、地域の教育文化においていかなる意味を有するのかを検討する。地理的条件や環境に規定されるなかでの教育課題とはどのようなものであり、それがどのように中学校を性格づけていったのかを考察する。

以上のような作業を通じて、戦後開拓地という新しい地域社会にとって、中学校はいかなる意義を有するものとして受け止められたのかを検討し、そこから浮かび上がる中学校像とはどのようなものであったのか

について考察する。

２．対象と方法

（１）事例の概要

対象とする事例は、旧鳴沢村立東鳴沢中学校である。同校は1947（昭和22）年10月に設立された新制中学校である。のちに学校設立の過程について詳しく見ていくことになるが、そこには複雑な地域の事情が介在していた。

この学校を特徴づける要素としては、ひとつは旧陸軍の演習場兵舎の建物を転用して設立された学校であること、もうひとつはその学区域に戦後開拓地を含むことが挙げられる。東鳴沢中学校は独立校として発足しており、開拓地における分校建設の補助制度によるものではないため、純粋な意味での「開拓地の学校」ではない。しかし開校時点で学区域のひとつである山田野地区の戸数は100戸を超えており、その存在は学校の性格づけにも少なからぬ影響を与えていたと考えられる。

1955（昭和30）年には、生徒数の増加と校舎の腐朽が問題視され、旧鳴沢村内にあった第一鳴沢中学校との統合が検討されるが、財政難によって先送りされた。両校の統合は、1959（昭和34）年５月に行われ、翌1960（昭和35）年より新築された校舎での授業が開始された。なお、東鳴沢中学校校舎は、その後地元の財産区に払い下げられ、養豚小屋として使用されたのち、農機具置き場となって現存している。

東鳴沢中学校の12年間における推移を統計からたどってみよう。生徒数（図１）は、1947（昭和22）年の開校時には男女計71名であったが、翌年には100名を超え、1950（昭和25）年には140名に達している。1956（昭和31）年には181名となり、最高を記録している。この間、学級数は２（1947（昭和22）年度）、３（1948（昭和23）年度）、４（1949（昭和24）～1954（昭和29）年度）、５（1955（昭和30）年度）、６（1956（昭和31）・1957（昭和32）年度）と増加の一途をたどった（1958（昭和33）年度の学級数は不明）。

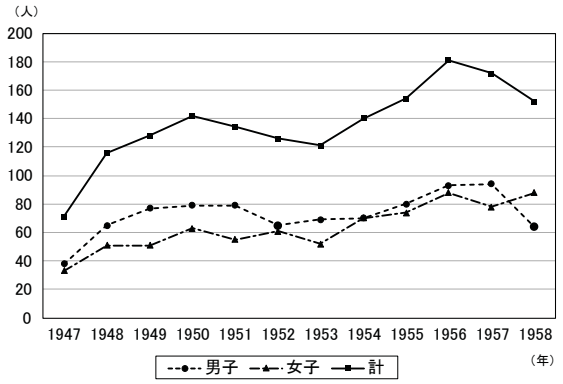

図１　東鳴沢中学校の生徒数の推移
『東鳴沢中学校沿革史』より作成

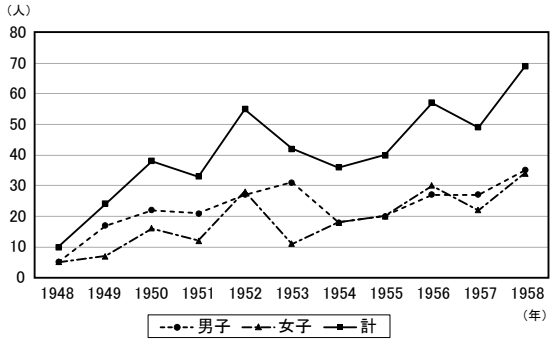

図２　東鳴沢中学校の卒業者数の推移
『東鳴沢中学校沿革史』より作成

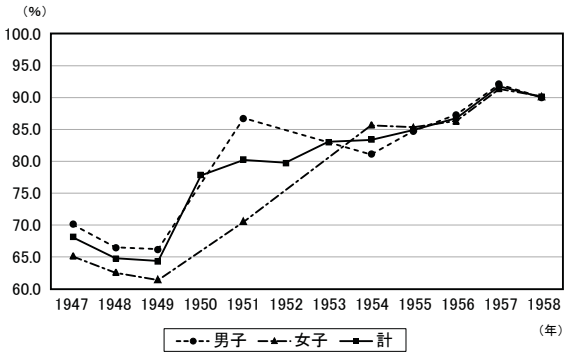

図３　東鳴沢中学校生徒の出席率の推移
『東鳴沢中学校沿革史』より作成
1950・52･53 年は男女別の集計が行われていない

卒業者数（図２）も、生徒数の増加と軌を一にして増加している。出席状況（図３）は、1940年代には70%前後である。この時期の中学校の出席率は、1949（昭和24）年時点で全国男子93.6%、同女子93.7%、青森県男子83.9%、同女子82.8%となっており[13]、全国平均はもちろんのこと、青森県内においても低い水準であったことがわかる。50年代に入るとようやく80%を超え、50年代半ばには85%に達し、また当初見られた男女間の格差もほとんどなくなっている。

（２）研究方法

『青森県戦後開拓史』『青森県教育史』『鰺ヶ沢町史』および西津軽郡において刊行された記念誌、教師の回想録および『東鳴沢中学校沿革史』といった文献資料を参照したうえで、2017年10月、2019年３月の２回にわたって、東鳴沢中学校の元教員２名を対象にそれぞ

れライフヒストリーインタビューを実施した。調査内容は、基本属性（氏名、出生年、教員になったきっかけ、東鳴沢中学校着任の経緯）、山田野地区の印象（赴任したときの様子、保護者や子どもたちの姿、出稼ぎの影響）、同校での教育実践（工夫や苦労、学校行事、保護者や地域の人びとへの働きかけ）、自身にとっての同校での勤務経験の意味（その後の教育経歴への影響、教師人生を振り返ったときの意義）、の４項目である。

聞き取りに基づくフィールドノートに加えて、対象者からは自身がまとめた回顧的な文章（記念誌などに寄稿したもの）の提供を受けた。これらも適宜参照しながら分析を行う。

（３）対象者

ライフヒストリーインタビューの対象者は、東鳴沢中学校に勤務経験のある木村賢治氏（1932（昭和７）年生まれ）と冨田得治氏（1928（昭和３）年生まれ）である。

木村氏は、上北郡横浜村（現横浜町）生まれ。旧出精村（現つがる市）の農家の出身で、国鉄職員だった父親の仕事の関係で、青森県内各地を転居し、1945（昭和20）年に旧制中学校に入学。途中で父親の転勤にともない転校し、在学中に学制改革によって新制高校への移行となった。家庭の事情で大学への進学を一時断念していた木村氏に、高校３年生の冬休みにひとつの話が舞い込んだ。「木村、おまえ成績いいはんで」と担任の教師に、教員になることを勧められた。そして高等学校卒業後の1951（昭和26）年４月に川除中学校（旧川除村、現つがる市）の助教諭として教師としてのキャリアをスタートしている。

東鳴沢中学校への赴任は1953（昭和28）年４月で、木村氏にとっては２校目の勤務校であった。国鉄を退職した父が、鳴沢村で農業を営んでいたこともあり、山田野地区を含む東鳴沢中学校の学区は、かねてから身近な場所であった。1955（昭和30）年４月に大戸瀬中学校（深浦町）に転出後、西津軽郡の中学校で教鞭を執り、岩木山麓の戦後開拓地のひとつである第二松代分校の本校である、鰺ヶ沢町立第一中学校長も務めた。退職後も鰺ヶ沢町青少年健全育成協議会会長などの地域の要職を歴任した。

冨田氏は、鰺ヶ沢町生まれ。大きな網元の家の６男であった。「家の跡を継ぐ者だけ魚に関する職業に就いてもよい。それ以外は魚に関する職業に就いてはいけない」という家訓に従い、漁業以外の仕事に就くことになった。1945（昭和20）年、旧制中学校を４年で繰り上げ卒業し、税務署に３年間勤めた。その後上京して旧制大学の専門部に進学する。就職先を決めて、鰺ヶ沢に帰省し、子どもたちに野球を教えていたところ、第一鳴沢中学校の校長に声をかけられ、非常勤講師として社会科を教えることになった。当時は給料の安い教員のなり手がなく、校長自らがスカウトに歩いていたところだった。自身は当初は教員になるつもりもなく、また免許も取得していなかった。すると、教育事務所の所長から電話が来た。指示されたとおりに学校に行ってみると、着任届と休暇願の書類が用意されており、そこに判を押して採用となった。1951（昭和26）年のことである。助教諭として、大戸瀬中学校（旧大戸瀬村、現深浦町）に着任した。

東鳴沢中学校には、1954（昭和29）年４月から１年間勤務し、艫作中学校（深浦町）に転出した。30歳で教頭となり、当時話題にもなったという。その後一時社会教育畑に転出するも、再び学校現場に戻り、鰺ヶ沢町立第二中学校長を最後に教職を退いた。

木村氏と冨田氏が教職に就いた時期は、教員不足も深刻であった。新制中学校発足当時、県内の中学校教員の充足率は59.4％であり、820名の補充教員が必要とされていた。２年後の1949（昭和24）年時点でも充足率は70％であり、残りの30％は助教諭に依存せざるをえない状態であった[14]。両氏は長い教員人生のなかで、５回同じ学校で勤務している。お互いに「腐れ縁」と称するほどの強い絆で結ばれ、そのキャリアの後期においては、西津軽郡全体の教育をリードしてきた人びとである。

（４）倫理的配慮

本稿では、「日本教育学会の会員が取り扱う個人情報の保護等に関するガイドライン」「一般社団法人社会調査協会倫理規程」に則り、対象者に対して事前および聞き取り調査時に本研究の趣旨と内容を書面および口頭で説明し、同意を得たことを確認して調査を実施した。なお対象者の実名については、本来であれば匿名とするのが通例であるが、すでに既刊書籍・資料等において原稿を発表されていること、また個性ある教師の歩みを匿名性に埋没させるよりも、固有の実践として記録する意義を鑑みて、対象者への説明と了解を得たうえで実名での記述とした。

３．開拓地と中学校

（１）開拓地・山田野との関わり

東鳴沢中学校への着任は、先にも見たように木村氏が1953（昭和28）年４月、冨田氏が翌1954（昭和29）年４月であった。いずれも初任校に次ぐ２つ目の勤務校である。

もっとも、２人には山田野地区との接点は以前からあった。冨田氏にとっては旧制中学校時代の野外教練の場であり、木村氏は以前から東鳴沢中学校からほど近いところにお住まいであった（ただし学区域はのちに統合される第一鳴沢中学校だった）。

木村氏にとっては、開拓地は身近な場所であり、その生活の様子も見えていた。

木村氏　開拓地に入植した人たちっていうのは、終戦になって帰ってきてですから、12月以降になったんですよ。県でもその体制がちゃんとできていないので、ここ（山田野）もそうですけど、長慶平（深浦町の戦後開拓地）もそうですが、入ったときは２月で、とにかくそこまで行くのが大変で、笹藪をこいで、笹を下に敷いて、それで寝起きしたと。ですから、１軒に７町歩割り当てられたでしょ。どうしてもその真んなかに家を建てると便利なわけでしょ。隣の間は７町歩も距離があるけれども、そういう点では、ポツンポツンとあるわけですよね。そういう点では苦労して。でも、団結が強かったんでしょうね。よく集まって話をして、満州はこうだったとか、あそこはこうだとかってみんなそういう話をして。

冨田氏は、1953（昭和28）年５月に持ち上がった米軍による山田野開拓地接収反対運動にも関わっている。

冨田氏　全学連の学生３人連れて、鳴沢で座談会を組んでいたら、その座談会に（当時の）村長が視察に来たわけです。私の顔を見たら、「なんだ、おめだちやってらのが」。行ったのは私の同級生と２人なんです。鯵ヶ沢の旧家のやつが２人、彼（村長）は「おめだち、やってらんだが」と。

このときの反対運動では、労働組合に加えて教職員組合も中心的な役割を果たした。同年８月には青森県庁の前で大規模な抗議活動も行われ、結果として接収計画は中止となった。

このように、木村氏、冨田氏とも、東鳴沢中学校在職期間を超えて山田野地区との関わりを有していた。

（２）東鳴沢中学校の設立過程

東鳴沢中学校は、同校の沿革史によれば1947（昭和22）年10月６日付で認可、11月７日授業開始（東鳴沢小学校と併設）、12月25日校舎改築竣工式並びに開校式を開催、翌1948（昭和23）年１月19日新校舎使用、という経過を経て設立されたものである。当時としては数少ない独立校舎を持つ中学校であった。もっともその前身は旧陸軍山田野演習場第９号兵舎であり、開校に先立つ９月１日より仮教室として使用が開始されたものの、冬季の寒さのため授業不能となり、11月から12月にかけての改築を必要とした。

独立校舎であることと同時に、1947（昭和22）年４月１日に全面実施となった新学制のもと、西津軽郡では１町村１中学校の原則に基づいて設置が行われたなかで、旧鳴沢村には第一鳴沢中学校と東鳴沢中学校の２校が設立されたのも異例のことであった。

もともと鳴沢村では、村役場並びに農業会倉庫の２階を仮教室として独立鳴沢中学校が発足した（1947（昭和22）年４月21日開校式）。村では、この時点で山田野演習場兵舎の払い下げを受けて独立校舎を建設する計画を立てていたという[15]。しかし同年８月27日には村議会で独立中学校の廃止と小学校への併設が決議され、同29日には東学区において東鳴沢中学校建設委員会が結成され、猛烈な運動が展開された。この間の経緯には、独立鳴沢中学校の校長排斥運動があったとされる[16]。こうした動きによって、村は中学校を東西に分離せざるを得なくなった。こうして東鳴沢中学校は設置されたのである。

上記のように、東鳴沢中学校の建設にあたっては、湯舟、小屋敷、山田野、建石地区の住民の働きかけが大きかった。この４つの地区のなかに山田野が含まれていることの意味は大きい。というのは、他の３つの地区が既存の集落であるのに対し、山田野は戦後開拓によって成立した新たな集落だからである。木村氏は、この地区の異質性を「姓」から説明する。

木村氏　これは鳴沢地区全体の電話帳です。これをご覧になればわかるように、これは小屋敷で、ほとんどひとつの名字です。建石は２種類。それ以外の名字はまずないわけです。ほとんど全部。一方これが山田野。みんなバラバラでしょう。この他にもいなくなった（転出した）人でいろいろな名字があり

写真１　1955（昭和 30）年当時の東鳴沢中学校校舎
（北側から）

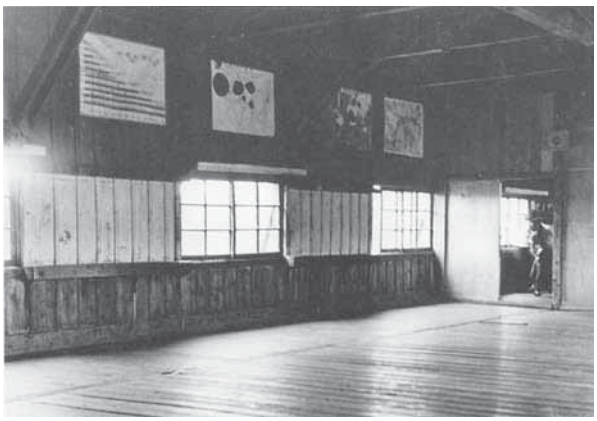

写真２　東鳴沢中学校の体育館
床に兵舎時代の框の名残が見える

写真３　東鳴沢中学校北側の廊下
窓の横には銃架が残る

写真はいずれも鰺ヶ沢町教育委員会提供

ました。

このことは、これまでの山田野地区での調査[17]からも明らかなように、開拓地が多様な背景を持つ人びとによって構成されていたことを意味する。反対に、周辺の集落は長年にわたって地域に根づいた人びとから成っていた。それぞれ背景の異なる集落がまとまって中学校設立を要求したのである。

（３）元兵舎の校舎

東鳴沢中学校校舎は、数少ない独立校舎（1949（昭和24）年６月時点で、西津軽郡内32校のうち、独立校舎を持つ中学校は同校を含めて３校しかなかった）として、他の学校からも羨望のまなざしで見られていたという（写真１～３）。新制中学校発足当時、青森県内で独立校舎を持つ学校は８校しかなかった[18]。新制中学校の独立校舎難は青森県でも大きな問題となっており、小学校に併設する形での二部授業といった形が当たり前だったのである。だがその実態は、先にも見たように、元兵舎の改造であり[19]、冬季には使いものにならないような建物であった。

校舎は生徒数の変化に合わせて、教室数の確保の必要が生じ、たびたび改築されている。1947（昭和22）年12月の開校式時点では、校長・職員住宅２、職員室、普通教室３、裁縫室１、屋内体操場１、という構成であった。のちに生徒数の増加により普通教室の確保が課題となり、教室の仕切りを変える、体操場を区切るなどして、最終的には６学級まで増加した[20]。

木村氏、冨田氏の在職時には、屋内体操場の狭隘化のため、１教室を体操場に充て、４学級を３学級にして経営していたところ、１年生が60名となったため４学級にせざるを得ず、１教室を作る（1954（昭和29）年６月）といった措置が講じられていた。

この学校には、普通の学校とは異なり、塀も門もなかった。

木村氏　ここは（建物を）移すも何もしない、そのままそっくりすぐ使えたわけですよね。ですから、中は改造したけれども、（周囲には）随分あちこち住家があったりね。体育館は広かったけれども、バスケットの設備をしてバスケットもやりました。卓球は盛んというか、するものないから、屋内はバスケットと卓球でしょ。外は年がら年中ソフトボール。昼休みだというと、あそこはスロープになっているでしょ。あそこで肥料の袋を入れたり何かしている袋があるでしょ。ああいうのでソリをやって遊んだんです。ズックのままで、ベルが鳴ればすぐそこに走っていってね。ですから、そういう点では、全く開放的な校舎。裏からも表からも出るのにいい

昇降口がありましたから、昼休みになれば、こっち側のスロープのほうを使って子どもたちが遊んでね、掃除のころになれば、こっち側の昇降口から逃げていくというね。それで、あの（元）兵舎でしょ。その隣が住宅として使われたんです。よく私たちの（学校）の隣の住宅には、随分人が集まって、婦人会がよく集まっていろんな活動をやっていた。

冨田氏　（学校に）行ったときには、机と教室と黒板があって、それだけです。廊下は斜面になってます。（元は兵隊たちの）ベッドを置くところだから。廊下の脇には住家があります。教室の脇にも住家があります。体育館にはバスケットゴールも何もない（のちに設置）。これで学校かと（思った）。

学校として使用するにあたり、改造が施されていたものの、廊下にはかつての銃架が残るなど、兵舎時代の面影が随所にあった。また周辺の旧兵舎は、順次解体され資材が転用される[21]などしていたものの、まだ数棟が残っていた。独立校舎でこそあったものの、学校の敷地自体が外部とはっきり区切られているわけでもなく、冨田氏が抱いた印象のように「これが学校か」というものであった。

４．学校と地域社会

（１）学校への理解

先にも見たように、東鳴沢中学校は鳴沢村の東部地域の人びとの熱心な運動によって設立された。戦後開拓地をめぐっては、しばしば以前からいる人びとと、新たに入植した人びととの間での軋轢や、とりわけ引き揚げ者に対する差別的なまなざしがあったとされる。また、入植者内部での様々な葛藤もあった。緊急開拓事業期に入植した人びとのなかからは、少なからぬ離農者が生まれ、また開拓組合内部の対立といったことも生じている。これらは全国の戦後開拓地に共通して見られたことであった。

そうした状況のもと、山田野地区の人びとの学校に対する姿勢はどのようなものであったのか。木村氏、冨田氏の在職時、山田野地区では地域の請願によって1954（昭和29）年４月に小学校分校（東鳴沢小学校山田野分校）が開校した。かねてから教育に対する地域の要求は高かった。そうした姿は木村氏の目にもはっきりと映っていた。

木村氏　開拓の人たちの学校に対する理解は、非常に強かったですね。というのは、分校を作ったりしたり、そういう熱意で表されているように、教育に対しての願望みたいなもの、それからこの子どもたちを何とかしなければならないと。それは学校に、教師に協力を惜しまないことだと、それはあったようですな。

複数の地域の子どもが集まる学校においても、山田野地区の生徒たちが差別的に扱われることもなかったという。その背景にあるのは、生徒たちの親の姿勢だと木村氏は捉えている。

木村氏　子どもたちは別にいじめたとかいじめられたとか、そういうことはなかったですね。ただ、（学区内には）１つ、非常に大きい集落があって、バッと固まっているから、団結して。そういう点では、非常に乱暴であったし、よそのところは小集落でしょ。こっち（大きい集落）は200戸もあるところで、こっち（山田野）は60か70世帯でしょう。迫力が違う。山田野の人たちっていうのは、そういうなかにあっていじめに遭わなかったな。特別扱いしたわけでないけど、大体、めそめそしたり、物を欲しがったり、そういうようなことはなかった。親が毅然としていたから、その家風や気風がある。自分でもやるけれども、徹底して協力し合うというような、山田野の人たちにはありましたね。そもそもここに入植したときは、自力でやらなければどうにもならない。よそのことなんかかまっていられないというぐらい大変であったと思うんです。ところが、だんだんみんなで相談して、子どもたちが活躍している場面を見たり、それから、集落の子どもたちと交流して、そこで助けたり助けられたりしている。

ここから見いだせる山田野の入植者の特徴は、２つに整理できるだろう。ひとつは、元将校や、帝国大学を卒業した人、といったエリートが含まれる入植者たちが持つ「家風」や「気風」であり、もうひとつは自力で始めた開墾から、やがて生まれてきた協同性である。

（２）開拓地の生徒像

上に見たような山田野地区の人びとの姿は、生徒たちの違いにも表れていた。

木村氏　勉強でも何でも、山田野の子どもたち、できましたよ。逆に、こうやって助けられる場面が多かったですよね。あとのところ（山田野以外の地区）は大体、裕福に育っているから。生活は苦労がないからね。そういう点でおっとりしてるっていえばいいか。それこそ湯舟でも小屋敷でも建石でも、田んぼもありリンゴもあり、生活的に苦労はないから、その後継者になれるわけでしょ。ところが、山田野の子どもたちは、そういうようなバックが非常に弱いわけです。

そうした違いは、中学校卒業後の進路にも反映されていった。入植者の子どもたちは、他の地区の子どもたちとは異なった進路を描いていた。

木村氏　そうすると、何か自分で職を身につけなければならないので、よく青森とか東京までも就職したんですよ。そういう点では、それぞれの生活を背負って、見通しを持ってここから巣立っていく、そういう人たち。執着しないといえばいいのか、ここにいてもどうにもならないわけです。今みたいに機械でも何でもあって、人に頼らないでいろいろなことができた時代と違って、機械がなければ今はどうにもならないでしょう。旧来のところでは、人手が多くあればあるほど、リンゴでも田んぼでもやれるわけでしょ。ですから、別に出稼ぎに行かなくても家の財産で、そこから財産を分けてもらって分家すればいいわけであって、ですから、名字はそのまま。ところが、こちら（山田野地区）のほうはそれがないから。そういう点では、子どもたちが運命的に、宿命的にそういうことを小さいときから自力でやっていくしかない。

まさに集団就職が始まろうとする時期において、相対的に豊かな農村を背景にした東鳴沢中学校の学区では、就職のために地域を離れることはそれほど差し迫ったものではなかった。そのなかで山田野地区の生徒たちはいち早く「出る」ことを宿命として受け止めなければならなかった。開拓者の子どもたちは、少なくともこの時点においては、もとから地域に根づいた人びとの子どもたちとキャリア像が異なっていたのである。木村氏は、東鳴沢中学校から転出後、1960年代には集団就職者の追補導にも奔走した[22]。

木村氏　行ったら３畳間に２人いてあったね。もちろん、風呂はない、銭湯に行くんだけど、休みも別、ラジオだってろくに聞けない。だけども、親は帰ってくればだめだというでしょう。向こうのほうに就職したから、東京さ行ったんだからいいところにいるだろうと。そういう点で、非常につらい。そういう点は、山田野の子どもたちはそういうところに出かけるというか、それが運命でもあるだろうし、別に大儀がらない、環境に飛び込んでいくというかな、特に農業だけやっている親元と、戦地で苦労して帰ってきてここに入植した人たち、我々は拾った命だと。あの苦しみを考えれば自分の子どもにもいつまでもくっついてやるというよりも、何とかして独立させなきゃと。

木村氏は、自ら山田野の入植者たちとの交流を図っていった。

木村氏　山田野の開拓組合の事務所が集会所でもあったんです。私たちはそこを拠点に山田野の人たちとの交流をしました。放課後、夜、あそこへ、県の教育委員会で貸し出していた「ナトコ」という16ミリの映写機（米軍が戦地慰問用に製造し、戦後文部省に払い下げたもの）を持って行く。フィルムは各教育事務所に輪番で行くから、フィルムのプログラムはしょっちゅう来て、それから選んで。時代劇もありましたし、いろんなのがあって、それを持って映写会に出かけたんです。それも「ナトコ」の映写の技師の資格を取らなきゃだめだから、取って行ったんです。夜、出かけていってね。（山田野の人びとは）大変喜んで。それから、要望があるわけです。また来てほしい。要望に応えるわけでしょ。そういう点では、学校が文化センターみたいな、そこの事務局みたいな役割を果たしていたんです。

こうした活動は、東鳴沢中学校学区の他の地域では行われず、山田野地区に限られた「サービス」であったという。

もっとも、学校と地域との関わりについては、冨田氏はやや異なった印象を持っていた。冨田氏から見た東鳴沢中学校は、地域とのつながりが少なく、ＰＴＡもあるのかないのか不明な状態であったという。

冨田氏　当時の教頭先生から、地域とのつながりを深くする方法を考えようと提案されて出た結論は、「地域が来ないなら、こっち（学校）から地域へ行

こう」というものでした。そして地域懇談会を始めました。後には定期的に実施するようになりました。

地域からの学校に対する支持は一方向的なものではなく、学校からの地域への働きかけや交流がなされていたことがここから窺える。

５．教師の実践

（1）指導環境をめぐる困難

これまでにも見てきたように、東鳴沢中学校の指導環境は決して恵まれたものではなかった。そうした状況のもとで、教師たちは様々な工夫を行っていた。

木村氏　物はなかったですね。だから、私は、高等学校の理科の先生、そこに資料をもらったり、それから、教材を借りてきたりなんかして。そういう点では、よその（教科の）先生方に比べて不便だということはなかったですね。生徒たちはどの教科に関しても、みんな頑張っていた、特別さぼったりなんかしたりするような教科はなかったですね。私は理科を受け持っていて、学校に放送機、中古の放送機を用意してもらって、学校放送というのをやったんですよ。新聞から記事をとっていって、朝のニュース、それから、子どもたちの作文の朗読だとかね。それまで学校に放送設備がなかったんです。職員室の片隅に、机一つ置いて、そこに放送機を据えて、それで放送を始めた。朝の放送をスーッと聞くんですよ。子どもたちもそれが「文化」だと思っていたかもわからないな。

この学校放送は、木村氏と冨田氏とが協力して始めたものであり、冨田氏にとっても思い出深いものであった。

冨田氏　それで、放送機もなかったんです。始まりは、ガランガランガランでした。「今どき放送機ねえ学校あるもんだか」。校長は黙って下を向いている。それで夏休みが終わって学校に出ていったら、放送機が廊下に、教室にもあった。「あれ、放送機できだんだでば」といったら、校長は「うん、おめにしゃべられだはんで、放送機を取り替える学校ねべがって聞いたっきゃ、あった。そこに行って古しいやつ、ただみたいに安くてあったはんで買ってきてやった。買ってきたはんで、何かやれ」という。（木村氏と）相談する。「何やる？」「毎朝、おもしれぇ話っこ、子どもニュースの時間、５分持つべし」。２人で交代しながらやるけど、あれも大変なもんでしたね。面白い話題がないときがあるんですよ。だから、あるときはいっぱい、話題も作っておかないといけない。３年生の教科書に放送劇の脚本があったんです。スウェーデンの漁師で、渦巻きに吸い込まれる脚本があったから、これをやろう、と。３年生の生徒を中心に、大人が１人だから大人は私がやって、渦巻きの音だとか小鳥の声だとか、鳥はレコードがありますから、木村が脚本の、こうやったらこう、こうやれとやる係で放送劇をやった。

学校放送というインフラの整備が、２人に共通する思い出として語られている。当時よりも時期を遡るが、1949（昭和24）年６月時点で、青森県内の中学校は285校、西津軽郡内では32校であったが、放送室を備えているのは県内で17校、郡内では５校のみであった[23]。制度としての新制中学校が発足してから７年ほどが経過していても、いまだ形成過程の途上にあり、個々の教師の取り組みによって形作られていった。木村氏の表現にあるように、それはまさに「文化」を作る活動であった。そして木村氏は書道部を、冨田氏は野球部をそれぞれ立ち上げた。

（2）学校行事を作る

世代が近く、同じ時期に着任した木村氏と冨田氏は、それまで学校になかった行事作りに着手する。そのきっかけとなったのが演劇活動であった。

木村氏は、前任校の校長が演劇が好きで、職員全員で劇に出るといった経験を通じて、興味を深めていった。冨田氏もまたかねてから演劇に親しんでいた。

冨田氏　私は演劇が好きだったんです。スポーツも好きだけれども、演劇。鯵ヶ沢に芸術文化協会というのがあって、演劇部にいたんです。そのときに石坂洋次郎さんにかわいがられたんです。石坂洋次郎さんの「青い山脈」のなかの一場面で、「カッコウ」という脚本があるんです。（金谷）六助という子どもが女の子と一緒にデートしたのが見つかって（という場面）。その六助が地で私とそっくりだったんです。演技しなくてもいい。地でいけばいいっていうことで。その発表会をやったときに石坂洋次郎さんが見に来たんです。弘前の劇団と黒石の劇団もこ

れをやっていて、鯵ヶ沢でもやったから見に来たけども、気に入ってしまって、今日連れて帰ると。石坂洋次郎さんの家に行って一晩泊まって、生まれて初めてすき焼きっていうのを食べて。石坂洋次郎さんの家は津軽弁でいいんですよね。奥さんも子供さんも津軽弁でいいんです。話がおもしろいって笑って。

だが、当時の東鳴沢中学校には学芸会がなかった。木村氏と冨田氏は、協力して学芸会を開催することにした。

冨田氏　学芸会もやったことなかった。学芸会がない学校があるもんだかと。やっても誰も来ない。やり方が悪いから誰も来ない。宣伝が悪いので誰も来ない。それで、学芸会のメーンは何ですかと聞いたら、職員演劇だと。それで山本有三の「嬰児殺し」を上演した。嬰児殺しをする奥さんが木村賢治、それを取り調べる警官が冨田得治、それから、大変だ大変だとはっけて（急いで）知らせてくるのは校長。体育館があふれるほど（人が来た）。

木村氏は、こうした学芸会の意義が様々な方向に影響をもたらしたという。

木村氏　創作劇もやったね。津軽の昔話を脚色して、それから、子どもたちが頑張って「コルシカの英雄」という劇も。そういうのって何年たってもこの人たち覚えているものですよ。先生たちも結構開発されたんでないかな。例えば、先生たちの交流っていえばいいかな、それは自然にそうなるんじゃなくて、地域から子どもたちからそういうようなムードみたいなもの、この子どもたちやこの地域の人たちには、我々がこういう活動をして見せてもいいんだというようなのがありますよね。職員劇だなんてやるとき、そのために何回も会議を開いたりしてやるんだけど、そういう点では、やるがっていえば、やろうというようなね。

学芸会は、地域の人びとの芸能発表会の場にもなっていった。そこでは保護者たちの踊りといったものも披露された。そしてこうした行事を媒介にして、学校と地域活動との交流も生まれていった。

木村氏　地域の人たちが学校の隣の住宅に集まって練習しているんですよ。その発表の場は、鳴沢全体の婦人会連合会の発表会があるんです。それに出すわけです。その指導者が私であったんです。演劇のね。また、寄り集まっていろんなものを活動するのに食生活があるわけです。いろんなものを持ち寄って、そこで作って食べる。工夫、アイデア、料理の講習会みたいなものがそこでも始まるわけです。自分だけでなく、よその人にもよその人にもというような発想が、そういう場を盛り上げていくわけです。ですから、みんな貧しくて、材料だってそうないんだけども、いろんなものを工夫して、こういうものを作ったからみんなで食べてみようとか、そういう生活の工夫みたいなものがそこにできてくるわけですよね。

東鳴沢中学校は、門も塀もない学校であった。しかも隣接して住宅が存在した。学校と地域との垣根が低い学校であった。かつては地域社会とは隔絶した場所に立地した学校は、新しく形成された地域[24]に向けて開かれ、そして新たな地域づくりの中核的な存在となっていった。地域の人びとを巻き込んでの学校行事もまたその一環となっていた。

冨田氏　東鳴沢中学校っていいなと思ったのは、農繁期がいっぱいあって、１学期はほとんど勉強できないような状態。りんごの袋かけだとか、田の草取りだとか、それだけで。私はあそこで一番楽しかったのは、毎日、ニワトリの鍋で、放課後、カラオケはないけれども、一杯飲んで歌を歌って。

こうした教師たちの一連の取り組みからは、草創期の地方の新制中学校に共通する課題と、開拓地を含んで成立する学校ならではの課題の二相が見てとれる。それは前者に関していえば、モノや情報が乏しいなかでの「文化」の創出と伝達という課題であり、後者は、学校が新たな地域社会を作るという課題である。戦後開拓地では、様々な背景を持つ第一世代において、しばしば葛藤や対立が見られた。しかしそうした葛藤や対立は、第二世代においては学校という共通体験を通して緩和される[25]。

中学校という場は、背景の異なる子どもたちの差異をある程度縮減していくものであった。しかし完全に縮減したわけではない。それは卒業後の進路に表れる差異となって残っていった。

６．西津軽の教育のなかで

東鳴沢中学校での在職期間は、木村氏が２年間、冨田氏が１年間と、決して長いものではなかった。そして東鳴沢中学校じたいもまた、1955（昭和30）年３月31日に、町村合併によって鰺ヶ沢町立東鳴沢中学校となったのち、1959（昭和34）年５月１日に第一鳴沢中学校と統合し、鳴沢中学校となった[26]。にもかかわらず、そこでの経験は、現在もしっかりと記憶されている。

その後、両氏ともに西津軽郡の学校で教鞭を執り、校長を務めた。その間に勤務した学校の多くは、小規模校であった。

冨田氏　男が燃えたときっていうのは、一番燃えたのは芦萢（中学校）。なして燃えたかっていうと、芦萢の生徒はすごく純情で、いい子どもたちばかりなんです。私の住宅の周りは草ボウボウで、ヘビがいっぱいいるんですよ。子どもたちに、「先生の住宅、ヘビいっぱいいるはんで、お母ちゃん、おっかなくて表さ出れねんずや。草、刈ってけで、石投げ（捨て）てけねな」「うん、今日の放課後、やる」。それで草刈って、石投げて、畑作ったわけ、子どもたちが勝手に。それから、肥料持ってきて、種みんな持ってきて、みるみるうちに畑に野菜がなってきたの。その純情な子どもたちに、「あのさ、下の町さわ（私）の本、来てらはんで、取りに行ってけねが」というと、「行かない」。誰さしゃべっても「行かない」。「なして行かねんだ」「先生も行くんだ（行くのなら）行くばって」「わ、行くんだらなんも来なくてもいいんだもの。わ、坂のぼってくるの大儀だはんで。なして行かねんずや」「下さ行けば、『山猿来た』って石ぶつけられる」。

芦萢地区は、鰺ヶ沢町のなかでも山間部に位置する。その子どもたちが、下の集落の子どもたちから「山猿」と蔑まれているのを知った。それで冨田氏の「男が燃えた」。スキーの指導に取り組み、やがて芦萢中学校の生徒たちは県大会でも優秀な成績を収めるようになる。

木村氏は、西津軽郡の学校には地理的条件に基礎づけられた課題があるという。

木村氏　ともかく西津軽や北津軽は、へき地校が多いです。特に西津軽は、よそのところと比べて、海岸、地理条件があるわけです。海岸に沿ってのところと、奥に入っても、それこそ山が多いので平らなところではないわけです。急に山になる。そういう点で、地理的条件があるので、平野部の学校に比べてそれこそへき地が多い。

その結果、西津軽郡では、同じ津軽地域でも独特の教育文化が築かれていった。と同時に、そこではひとつのあるべき教師像も形作られていった。

木村氏　へき地の教育は、どうしても個の指導に重点が置かれるわけです。複式をやっても何をやっても、個を大事にするという指導。作文教育[27]にしても何にしても、個を知るには個の生活を知る、そういうのを確かめるのは作文でしょう。ですから、非常に作文指導が多い。作文指導をするとなれば、お互いに生活をざっくばらんにしなければいけない。生活をとことん知るために話し合ったりする。そういう研究というか、へき地の先生たちは、へき地にいるということそこだけで固まってしまうけど、交流することによって技術が磨かれていくわけでしょ。その点の教育が集団化されていくと塊のあるものになっていく。ですから、町場の子どもたちの作文なんかに比べると、作文そのものが生々しいわけです。生活感。その生活を知っている教師でなければならないわけです。それを指導できるというのは、そういう生活体系に教師が直に触れたり、または、間接的に触れなければ指導はできないのです。そういう点で、へき地の子どもたちの生活綴り方を指導できるというよりも、一緒に綴り合う教師がそこにいなければだめなわけです。そして東鳴沢中学校での体験は、「生活のなかに教育がある」「教育のなかに生活がある」という原点として貴重でした。

ここで木村氏が強調する「生活」は、戦前からの生活綴り方から引き継がれたものであると同時に、戦後という時代において新たに模索されたものであった。この新たな生活の模索は、当時全国各地で繰り広げられたものであったが、戦後開拓もまた、それを顕著に体現したものであった。新たな生業を得る、そして新たな地域社会を形成する、または地域社会の新たな一員となる、といった戦後開拓地の人びとにとっての課題に対して、学校はそこに触れ、ときに一緒に綴り合う存在であった。

小括

本稿で検討したひとつの新制中学校のありようは、当時の全国の中学校が直面していた課題と共通する側面と、戦後開拓地を学区に含む学校ならではの課題とを有していたと考えられる。分析対象は1950年代半ばという時期の限られた事例にとどまるものの、教師の目から見た学校と地域社会との関係からは、以下のような特徴を見いだすことができる。

第一に、独立校舎を有する中学校の設立過程においては、既存の集落とともに開拓地の人びとが運動の担い手となったことが挙げられる。地域構成からして、既存集落とは性格を異にする戦後開拓地が、ここでは他の集落と合同で「猛烈な運動」を展開したことは、山田野という開拓地が、他の戦後開拓地とは異なったまなざしを注がれる存在であったことを窺わせる。

第二に、開拓地の入植者たちが、既存集落の人びととは異なった学校に対する理解と意味づけを持っていた可能性が示唆される。農家以外に出自を持つ人びとが多く含まれていた入植者たちは、教育に対する願望を強く持ち、子どもの将来にとって学校が重要な存在であることを強く意識していた。実際に子どもたちの学力も総じて高かった[28]。そして、子どもたち自身もまた、農業を中心とした他の集落とは異なり、他出することを「宿命」として捉えていた。入植者の子どもたちは、やがて地域全体を覆う集団就職による青少年の都市への大規模な移動の先駆けでもあった。

第三に、新たに設置された中学校は、新たな地域社会を形成・維持するための働きかけを行う場でもあったということである。学校行事は、生徒たちだけでなく、地域の大人たちをも巻き込み、地域の行事となっていった。こうした機能はもちろん小学校においても担われるものであったが、ときに小学校がひとつの地区や集落を単位としていた（小規模校の多い西津軽郡ではその傾向が強い）のに対し、複数の集落を学区とする中学校は、これらを結び、交流する機会を生み出すものでもあった。

第四に、この時期の中学校は、小学校と同様に「生活」に寄り添うことが求められた。この「生活」という主題は、西津軽郡の地域特性と、戦前からの生活綴り方実践における課題を引き継ぐものであった。そこに新たな「生活」を模索する戦後開拓地の課題が折り重なっていった。

本稿が対象とした時期は、高度経済成長期の集団就職の前段階ともいうべき状況であった。ここから見えてくるのは、新しい制度のもとでの中学校が持っていた、戦前からの教育課題と新たな教育課題の双方に向き合うという、過渡的性格である。

以上から、次の２つの課題が導かれる。ひとつは、小学校と中学校の接続を問うことである。この時代の小学校、中学校は、それぞれが地域社会と深い関わりを持っていたがゆえに、分校設置要求や学区の見直しといったことがたびたびなされていた。したがって、両者の接続は地域社会の相互の関係構造を問うことにもつながる。そしてもうひとつは、この地域の教育文化とも関わる教育運動（とりわけ教職員組合活動）と学校の関係を問うことである。そこでは何が課題とされ、そして学校においてそれがどのように解決されていったのか（ないし解決されなかったのか）を分析する必要がある。これらの考察を通して、戦後日本社会における地域と学校の関係を明らかにしたい。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、対象者の木村賢治氏、冨田得治氏には聞き取り調査に加え、回想録や記念誌等の資料をご提供いただくなど、多大なる協力をいただきました。また鰺ヶ沢町教育委員会統括学芸員の中田書矢氏には、学校関係資料のご提供をいただきました。特に記してお礼申し上げます。

附記

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C）（一般）課題番号17K04519）による研究成果の一部である。

註

1 「旧山田野兵舎が倒壊の危機」『陸奥新報』2018年12月20日付朝刊、第３面。

2 山田野地区における小学校分校設置に向けた取り組みについては、高瀬雅弘「戦後開拓地における学校と地域社会（１）―1970年代の小学校分校における教育実践と地域社会の相互作用に関する事例研究―」『弘前大学教育学部紀要』第120号、2018年を参照。

3 蘭信三「満州開拓団を母体とする戦後開拓集落における『共同性』―熊本県東陽開拓農協の事例―」『ソシオロジ』第33巻１号、1988年。

4 木村元『学校の戦後史』岩波新書、2015年、PP. 64-65。

5 同上書、P. 90。

[6] 一例として、白井二尚・福尾武彦「日本の農山村と教育」、稲井広吉「漁村と教育」海後宗臣・牧野巽編集代表『講座　教育社会学　Ⅳ　地域社会と教育』東洋館出版社、1953年所収。

[7] 馬場四郎「教育環境としてのへき地―山村―」、籠山京「教育環境としてのへき地―開拓地―」海後宗臣・牧野巽・細谷俊夫編集代表『講座　教育社会学　Ⅸ　へき地の教育』東洋館出版社、1956年所収。

[8] 無着成恭編『山びこ学校―山形県山元村中学校生徒の生活記録―』青銅社、1951年。

[9] 明治期以来の開拓地で、戦後に引き揚げ者の受け入れを行い、既設の小学校に中学校を併置した北海道の地区を対象にした研究としては、佐藤守「開拓村における学校の基本的性格―北海道白老町森野の事例―」『秋田大学学芸学部研究紀要　教育科学』第17号、1967年がある。

[10] 橋本紀子「農村社会における〈学校から職業社会への移行〉―秋田の『集団就職』―」、横畑知己「高度成長期の中学校における『進路指導』問題―全国進路指導研究会に参加した教師たちの実践に即して―」橋本紀子・木村元・小林千枝子・中野新之祐編『青年の社会的自立と教育―高度成長期日本における地域・学校・家族―』大月書店、2011年所収。

[11] 一例として、鈴木雅司「酪農の産地形成からみた戦後開拓農村の変容―岩手県岩手郡滝沢村の事例―」『新地理』第32巻２号、1984年などがある。

[12] 髙瀬雅弘編『山田野―陸軍演習場・演習廠舎と跡地の100年―』弘前大学出版会、2014年。

[13] 青森県教育庁秘書調査課編『青森県の教育―教育要覧―』昭和28年版、青森県教育委員会、1953年、P. 225。

[14] 青森県教育史編集委員会『青森県教育史』第２巻　記述編２、青森県教育委員会、1974年、P. 678。

[15] 奈良廣太郎『軌跡Ⅱ―西郡教員組合運動史序説―』文芸印刷事業出版、1990年、P. 138。

[16] 同上。

[17] 前掲『山田野』を参照。

[18] 前掲『青森県教育史』第２巻、P. 676。

[19] こうした元兵舎を利用した中学校設置は、海兵団や海軍の施設を利用した田名部町（現むつ市）や大湊町（同）でも見られた（青森県教育史編集委員会『青森県教育史』第５巻　資料編３、青森県教育委員会、1971年、P. 218）。

[20] 校舎の空間的変遷については、中田書矢・小山祐司・中村隼人『山田野の建築遺産―岩木山麓に残る陸軍演習場跡―』鰺ヶ沢町域学連携事業実行委員会、2016年に詳しい。

[21] 戦後直後の資材難の時期には、兵舎の部材は入植者の住居の他、学校建設にも用いられた。山田野演習場の兵舎の一部（第８号兵舎）は、飯詰村（現五所川原市）の中学校の建設資材に転用された。

[22] 木村賢治「追補導をふりかえって」西津軽郡中学校長会編『風雪四十年―未来に向けて―』青森県西津軽郡中学校長会、1987年。

[23] 同上書、P. 36。

[24] 緊急開拓事業期に入植した人びとが旧兵舎から移転した後、旧山田野演習場廠舎の敷地には、北浮田地区の農家の二三男を中心とした人びとが新たに入植した。

[25] 髙瀬雅弘「岩木山麓の開拓のあゆみ―『開拓者たち』の70年―」「岩木山を科学する」刊行会編『岩木山を科学する　２』北方新社、2015年。

[26] 統合後も、東鳴沢中学校校舎は鳴沢中学校第一校舎として引き続き使用され、1960（昭和35）年12月に新校舎が竣工したのを受けて、学校としての役割を終えた。

[27] 西津軽郡で盛んに行われた作文教育については、稿を改めて検討したい。

[28] このことについては、山田野地区に設置された小学校分校に関する聞き取り調査でもたびたび言及されていた（髙瀬、前掲論文）。

（2019. 8. 9　受理）